

今どきハイデガーを読むということ——公共性の絶え間ない構造転換の中で

高田珠樹

2008年9月20日

今回のフォーラム全体の題目が広がりをもったテーマであり、ハイデガーの作品のある箇所について自分の読み方や解釈を披露したり、概念を吟味して、ハイデガー解釈の新しい視点を提示するというより、常日頃、自分がハイデガーに関連して漠然と考えていることを纏めながら、今日、私たちがハイデガーを読む意義などについて議論するきっかけとなりうるような話題を提供したいと考えます。

1) ハイデガーを語る私たちの「公共圏」

i. ハイデガーは大学界隈の公私の狭間で読まれている。

- ハイデガーが公共性の概念と連関させて論じられるのには、思想や哲学の研究がそれほど社会的に評価されず、ハイデガーへの関心も高くない時代に、その研究意義を再確認しておきたいというとの意図が感じられる。
- ドイツでも日本でハイデガーは主として大学で、大学に関わる者によって読まれている。
- 一方で、今の大学の中でハイデガーを読む場、読んでいられる可能性は次第に狭まりつつある。
- もともと、ハイデガーは、大学そのものと言うより「大学界隈」、大学の公的な場からやや外れた場所（個人研究室等）、大学で勤務する者、学ぶ者らの「私的」な場で読まれ、時に大学の中に空間的な場所を借りて、ただし大学の通常の「公的」な催しから外れた「私的（あるいは公的）」な催しの中で「公的」に論じられてきた。

ii. 戦後日本のハイデガー受容と大学制度

- 戦後の日本で長く、ハイデガーはドイツの言語文化を知的に代表する同時代人として受容されてきた。
- 戦後世界が米ソを軸に旧連合国を分割され、西側ではアメリカ文化や英語が席卷する中で、ヨーロッパ文化は、新興の大衆文明に対抗する奥の深い文化という位置を担わされる。
- ハイデガーは、伝統的な欧州文化の中のドイツを代表する存在として受け取られ、日本と親和的なドイツのナショナルなものを、あるいは、戦後の英米圏の文化を基準にしたグローバルな価値に対するローカル性をを代表する役割を担わされる。
- ソ連型共産主義には馴染めない若者にとって、アメリカ文化に対する有力な対抗軸、その象徴的な存在としてのハイデガー。

→ 日本では、ハイデガーのナチズム加担が、アメリカやフランスにおいてほど問題視されない所以。

- 戦後の大学の中での教養課程や第二外国語の枠が、ドイツ語やヨーロッパ文化の受容を制度的に保障する一つの擁壁として機能これが、ハイデガー受容を制度面で守る。
- 要するに、戦後の日本でのハイデガー研究の層の厚さは、アメリカ主導による日本の大学への教養課程の導入や大学新設のせいで、人文系の研究者の大学への就職機会が増え、他方ではアメリカ主導の世界秩序に対する違和感によって鼓舞される。

2) 「公共性の構造転換」としての『存在と時間』

i. 『存在と時間』は、公共性から共同性に向かう魂の転換の物語でもある。

- 『存在と時間』も、(ハーバーマスの言うのとは違った意味で) いわば「公共性の構造転換」という構造を備えている。
- 『存在と時間』の既刊部、つまり還元・構築・解体のうち「還元」の部分人間の在りようとして「世界内存在」を取り出し、それを
 気遣い(Sorge)、時間性へ還元し、さらに歴史性として具体化する。
この過程は単に「客観的な分析」として提示されているのではなく、
現存在が、自分そこにいるのを見いだす公共性・公開性 (Öffentlichkeit) への頹落から、
 良心の声による呼びかけと死への先駆を経て、自分のいる場への回帰、
 既在性の反復として、遺産の選択と授受、現存在の運命化、共同体の生起にいたる。
- 要するに、現存在が、公共的な在りようから、死への先駆を経て、
 民族の共同体との一体化に至る過程。
- それは、また公共性の世界が、表層から深化して、その根底に潜むアレーテアがあらためて隆起してくる過程とも言える。

ii. 共同性の範囲と民族の共同体

- 『存在と時間』では、公共性とは、現存在が自己を包む社会との一体性を実現していない状態であり、最終的にそれは民族の共同体へと回収されるべきものと考えられている。
- ハーバーマスの『公共性の構造転換』は、近世初期の啓蒙の時代の有産の教養市民が私的な利益を越えて実現を目指しながら、十九世紀における公私の境界が曖昧になることで衰退する過程が辿られる。
- 公共性を近代が追求すべき未完成のプロジェクトとして考えたハーバマスとは対照的に、ハイデガーはそれを嘆かわしい空談の場として考える。
- 近代が、メタレベルからの決定を失った時代、共同体の原理が自明でなくなった時代であるなら、公共性はそれに代わるものとも言え、ハイデガーの言う死への先駆とは、公共性という場で実現されない全体性への欲求を擬似的な形で充足するものと見なしうる。
- 公共性から共同性に転換する上で、理念として熱い共同体が考えられていた。しかし、その内実は、立ち入って規定されることはなかった。
- ハイデガーが考えた共同体・民族がドイツというナショナルなものであったかは、断定できない。それまでのハイデガーの思索には、民族的なものを感じさせるものはほとんど見当たらない。むしろ批判的な対決を通して背負い受けられるべき歴史の文脈はヨーロッパ、ないしは西洋の知の伝統と考えられている。
- 実際、第一次世界大戦によってヨーロッパとアメリカの関係は劇的に逆転し、戦中に出現したソ連や新興国日本に対する警戒感を含め、ヨーロッパが脅威に晒されているという危機感は、ハイデガーに限らず当時の多くのヨーロッパの知識人が共有していたものであった。

- しかし、たとえそういった偏狭なナチズム的世界観に直結するものではないにしても、ハイデガーにとって、公共性から逃れ出た先に、あるいは公共性が転換を果たした先に見えてくると考えられていたのは、自分とそれとが一体であると感じうる熱い共同体であった。それは、ドイツの民族共同体かもしれないが、ことによると、ヨーロッパ共同体、あるいは西洋と言う共同体かもしれない。ただ、当時、勃興しつつあったアメリカや、あるいはアメリカと共に西洋を挟撃しようとするソ連を含むようなものではなかったのは間違いない。

iii. 日本のハイデガー受容を支える固有の歴史的環境

- この反モダニズムが、米ソを中軸とする戦後世界の秩序と重ねあわされることが、日本でのハイデガー受容の背景にあったと考えられる。
- ハイデガー自身、民族共同体や、アレーティアの輪郭を明言しなかったことで、そこで語られる議論は、日本人からすると、自分たちに引き付けることをたやすくした。
- 一方で、日本でのハイデガー読解は、『存在と時間』が既刊部分に関する限り民族共同体の生成でクライマックスを迎えることをさほど重視せず、共同体への責任を呼びかける『存在と時間』も実存的な面や日常性の分析を中心に受容されてきた。
- 戦後日本の大学、とりわけ国立大学の中での、ドイツ語やドイツ文学が占めていた特権的な位置の中で、社会批判と社会離反の巧みな方策として利用されつつ、ハイデガーはほとんど唯一の生けるドイツ精神の化身として、戦後の大学界隈の公共圏と私的空間の狭間を生き延びてきた。

3) 現実の「公共性の構造転換」の中で

i. 哲学を取り巻く大学界隈の環境の変化

1980年代末から90年代初頭にかけて、日本でのハイデガー受容を支える外的な条件が大きく変動していく。

1987年 ファリアス『ハイデガーとナチズム』（フランス語版）

1988年 ファリアス『ハイデガーとナチズム』（ドイツ語版）

1989年（ハイデガー生誕百年）

天安門事件

東欧の社会主義体制、ベルリンの壁の崩壊

1990年 ドイツ統一

1991年 大学設置基準の大綱化 → 教養課程の改組、解体
ソ連の崩壊

- 八十年代末から九十年代初頭にかけて、それまでの冷戦構造が崩壊した。
- ほぼ同じ時期と言える九二年に大学設置基準の大綱化という中で、全国の大学は一斉に教養課程を改組、解体に踏み切り、教養科目の削減や第二外国語の必修が撤廃されてゆく。
- 冷戦の枠組みの崩壊とインターネットの普及によって生じたグローバル化と呼ばれる大きなうねりの中、第二外国語の中のドイツ語やフランス語の位置は一気に低下する。辛うじて残っている枠も中国語や朝鮮語によって圧倒的されていく。
- 環境や南北格差といった問題が浮上して以後、グローバル化の動きに対する有力な対抗軸として、日本の若者たちはヨーロッパ文化に期待していない。
- 21世紀に入り、大学の競争的資金の獲得が督促され始める。哲学も、「公的資金」の獲得量が問われ始めている。

ii. 立ち位置の困難

- 『存在と時間』において、公共性がアレーティアの共同体へと転じる上で、その範囲は曖昧にとどめられたことが、日本のハイデガー受容を容易としてきた。
- 同時に、米ソを中心とする戦後世界の価値観に対する違和感の支えとしてのハイデガーへの期待や欲求も後退する。
- ハイデガーを初めとする西洋思想や文化の研究者の職業上の受け皿であった大学の雇用も急速に縮小する。
- 大学界隈の公私の狭間で、ハイデガーを読む、という巧妙な方策は通用しなくなりつつある。公的資金をどれだけ取り、社会への積極的な提言や貢献をどれだけしたかが問われるとき、ハイデガーフォーラムでも、ハイデガーと公共性が、あらためて問われることになる。